

# 歴史 探訪

「つづくしまへ」の系譜



## 「涙をたらした神」を生んだ

# 菊竹山の真実 三野混沌と吉野せい



『涙をたらした神』吉野せい 昭和49年初版  
(彌生書房)  
この作品は「百姓バツパ」の文学として、全国に大きな衝撃を与えました

昭和50年(1975)、76才の「百姓バツパ」吉野せいが著した短編集『涙をたらした神』が、文学賞を相次いで受賞、大きな話題を呼びました。この作品は、せいの夫で菊竹山(いわき市)の開拓農民、そして詩人の三野混沌(吉野義也)とともに開墾を続け、数々の困窮・苦難に立ち向かっていった「真実の生き方」があつてこそ、生み出されたものでした。ここでは、二人に関する企画展を開催した草野心平記念文学館主任学芸員の小野浩さんにお話を伺いながら、二人のひたむきな「真実」に想いを寄せてみました。

### 真の生き方を求めて開墾生活へ

ともに土と生きよう そんな混沌の熱意と純真に打たれたせいが、行李一つ、使い古しの机だけを持って菊竹山に嫁入りしたのは、大正十年(1921)春のことでした。少女時代には、当時平にいた高名な詩人・山村暮鳥らが主宰する詩誌『ル・プリズム』へ投稿するほどの才覚に恵まれ、日増しに文学への情熱を高めていたせいが、すべてをかなぐり捨てて開墾生活に入ったのは、なぜなのでしょう。

### 日々の闘いの中、心に何かを刻み合う二人

しかし、開墾生活の厳しさは想像以上のものでした。やがて家業もそこそこ、詩作活動や農地解放にのめり込んでいった混沌。その代償として満身風雪をものこし、生活という厳しい現実を、女手一つで担わなければならなかったせい。極貧の暮らしの中で、二人はいつも争いが絶えませんでした。混沌の詩は、常に生活の根元から発せられた「真実の言葉」でしたが、その作風は、論理や文法で理解しつるものではなく、混沌から投げかけられた空気の爆弾のようなものを受け止め、自分の心の中で爆発させてゆくもの(高草陽夫・元 吉野せい賞 選考委員)とも評されます。ロマンチストで現実離れが著しく、人から理解されがたい一面を持っていた混沌にとつて、「日常の感覚を超えた表現の手段」として、詩という形式は必然のものでした。これに対し、せいは、常に現実を見据えて生きる剛直さ、そして、あいまいさを嫌う厳しさと合理主義の持ち主……。その性格は、まったく正反対でした。それゆえに、時には互いに憎み合うようになった二人。しかし小野さんは、「それは決して敵対関係にあつたのではありません。混沌にとつてせいは、一番の理解者であり、最も厳しい批評家でもありません。せいは混沌のことをだれよりも認めていたともいえるでしょう。そして混沌も、せいの心をだれよりも知っていました」と分析します。相手と真剣に対峙し、分り合つてきたからこそ、互いの心に入り込み、何かを心に刻み合つ……。二人は、そんな濃密な時間と空間を共有し、激しくあらがいがながらも真実の生き方を求め続けました。そして、一家を支え、百姓バツパを貫いてきたせいに、昭和四十五年(1970)、大きな転機が訪れます。それは混沌の死です。



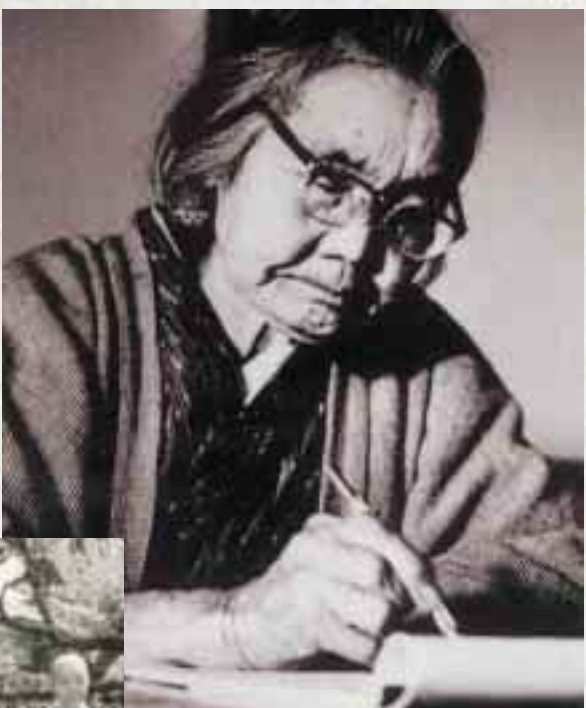
三野混沌(吉野義也) 明治27年(1894)、福島県石城郡平窪村(現いわき市平下平窪)生まれ。若いころから哲学に傾倒し、詩人であり伝道師の山村暮鳥との間にはくまれた生観・文学観を根柢とした、開墾の詩人。生涯を通して、菊竹山の土と作物と小動物と空と雲との対話を繰り返し、百姓の詩を書き続けた。詩集『阿武隈の雲』を刊行。昭和46年(1971)、76才で没



詩誌『播種者』(第2巻1月号) 大正12年(1923)、猪狩満直らとともに発刊。混沌は『陸稻のもち米一斗を売った代金で謄写版を購入。混沌の住まいは、編集部兼印刷・製本工場でした



昭和29年9月 菊竹山の梨畑(串田孫一氏撮影) 混沌は父から「ここの土は重いから、梨なら出来るだろう」という教えを受けました。二人は、日が暮れるのも忘れて梨の苗木を植えつけました



吉野せい 明治32年(1899)、福島県石城郡小名浜町(現いわき市小名浜)生まれ。高等小学校卒業後、独学で小学校教員になる。結婚後は農家心とすじ。昭和50年(1975)『涙をたらした神』で、第6回大宅壮一ノンフィクション賞と第15回田村俊子賞(この文学賞を受賞。ほかに、『暮鳥と混沌』など)。昭和52年(1977)、78才で没

### 伝え続けたい、ひたむきな真実

「今度はあなたが書く番だよ」と、旧来の知己であった草野心平に励まされたせいは、混沌のことを世に知ってほしい、という一心で、評伝『暮鳥と混沌』を二気に書き上げました。そして、菊竹山での阿修羅のような現実を、周囲への鎮魂を込めて描いた文学が、『涙をたらした神』だったのです。自然の中で肌で感じ、心でつかんだものを表現したこの作品は、苦しい生活に耐え抜いた強い精神が息づく剛直な文体の中に、鋭い観察眼とみずみずしい繊細な感覚が満ちています。その文章は、斧ですばと



昭和50年(1977) 田村俊子賞授賞式にて左から一人おいて草野心平、せい、瀬戸内寂聴、武田泰淳(彌生書房 提供)



「梨花」草稿 吉野せい 忘れはしない、梨花への鎮魂。昭和5年(1930)に次女梨花を亡くしてから、ずっと生活の真実を見つめ、心の中で醸成させてきたものが、文学作品という実りにつながっていききました



今では雑草が生い茂る開墾地。多くの詩人が行き交い、次女梨花や混沌の葬列を見送った「歴史の道」の奥には、旧宅、そして菊竹山があります



「天日燦として焼くがごとし 出でて働かざる可からず」 この碑の前で毎年4月、混沌をしるぶ「混沌忌」が行われています、と話す小野さん

木を割つたような狂いのない切れ味とも称されますが、これについて小野さんは、「混沌とせいの胸の中には、互いの心の内面までを映し出す鏡のようなものがありました。せいの文体の中にひそむ斧とは、二人が真剣に対峙した中で、鏡や剣のように鋭く磨き込まれた感情、感覚であったのかもしれないと推察します。混沌は、純粹無垢に理想を追い、真の詩作の生涯を費やしました。そして、混沌の生きざまを見届けたせいは、混沌と過剰した濃密な時間と空間の中から、生活の根元にある真実をどう昇華させることによつて珠玉の文学を生み出したのです。そして今、菊竹山の畑の一隅には、

心平の書による「天日燦として焼くがごとし 出でて働かざる可からず」という混沌の詩碑が建っています。ともすれば、なりふりかまわず全力で生きることに戸惑いを感じ、当たり前さわりのないひ弱な田舎を、仲の良い人間関係と誤解しがちな現代。互いに真実を求め合い、真剣に向かい合つて生きてきた二人は、そんな今の時代を、菊竹山の空の上から、どんな心持ちで眺めていることでしょうか。一人のひたむきな生き方は、今のわたしたちが失いかけている大切な何かを語りかけ、思い起こさせてくれていてくれるかもしれません。